

特集に当って

東京理科大学 山田 善靖

オペレーションズ・リサーチ誌の編集に関して2年がすぎた。私はこの2年間の経験を通してORに対する考え方と評価が変わったところが2つあった。

まずその第1は、ORの手法を深く理解すればするほど、現実の社会問題、経営問題、その他いろいろの問題を認識し、問題解決を行なうために役立つところが加速度的に多くなるということである。OR誌の編集の仕事をしていると知らず知らずのうちにORの手法の理解が深まってくるように思う。OR誌の編集に関して1年がすぎたころから、「これもLPの考え方を応用すれば解ける問題だ」、「これはDPの問題とみなせる」、「これは多目的の問題の応用問題だ」、「これは待ち行列の問題で定式化できる」などと、経営の現実の諸問題を認識し解決する手がかりが従来とは格段と違ってみえてきた。毎月毎月いろいろな論文を読み、あるときは一部修正をお願いしたり、長すぎて短い表現にしてもらったり、また難しすぎて一部の読者にしか理解できないと判断する場合には、わかりやすく書きなおしてもらったり、理論だけしか示していない論文には適用例をつけ加えてもらうなどが編集の大切な仕事である。そのために、かつては自分ではあまり興味をもっていなかったような分野の論文まで真剣に読まなければならなかった。このことが私のOR全体に対する理解力を一段と深めてくれたように思う。ORが実戦に役に立つかどうかは、当の本人がORをどこまで深く理解しているかによっているということを実感した。

第2には、ORが俗に言う世の経営者はORを難しい数学の解法であり経営とは無関係である、と考えているということである。「トップの視点」の原稿をお願いするときに、よく会社の社長さんから「私の経営は難しい数学を使ってはいませんのでOR学会の機関誌などにはとてもはずかしくて書けません」と言われた。私が“ORは難しい数学を使うこと”ではないのです、“経営の科学”ですので、“あなたの経営の考え方、経営の論理をそのまま書いてほしいのです”という、「それなら

ば書ける」といって引き受けてくれた。このような経験を通して私はORが経営のトップにいかにか理解されていないかということを実感したのである。チャーチマンとシャインブラットらが20年以上前にマネジメントサイエンス誌で指摘しているように、経営者とOR研究者は相互理解によってはじめて理解し合うことができるのであろう。そのためにも、まずORの側からの社会への働きかけが必要であると考えられるようになった。

この特集号は「ORの切り口」と題して、現実の問題をORの手法や考え方をもとにどのように解明しているか、またいかに広い分野までORが使われているかを会員さらに広く社会にわかりやすく紹介し、多くの人の理解を得ようというのが目的である。

論文数は全部で28編である。その構成はORが用いられる対象と手法に分けられる。ORの扱う対象としては社会の問題に関するものが4編、経営戦略に関するものが4編、金融に関するものが4編、マーケティングや物流に関するもの3編、FMSに関するもの2編であります。手法としては多目的計画法、AHP、シミュレーション、SD、交渉評価システム、支援システム、ボロノイ図法、LP、待ち行列などをいろいろな問題に適用した実例を主にして10編を紹介してもらった。

ORが実際の問題処理に使われ、有効な手段として認識されている実例はまだまだたくさんあるが、紙面の都合上ほんの一部分しか紹介することができないが、できるだけ広い分野にわたり紹介してもらった。このなかから生きたORの本質が理解されることを願っている。この特集号を企画、編集してきておどろいたことは、私たち編集委員が予想していたよりもはるかに多く「草の根」としてORが活躍しているということであった。ORの考え方はいまや経営問題処理、社会問題解決には溶け込んでいて、もはやORとは意識されなくて用いられている部分が多く存在する。いま私たちORを研究するものは、もう一度それを「あぶりだし」のように表面に浮かび上がらせて再認識再整理することが一層の発展につながるものと思う。実際の問題解決法をまとめ整理し、共通点を手法として確立させたものがORであり、実践に役立つことがORであるための必要条件ではないだろうか。